

百人一首ゆかりの地 福知山

「大江山 いく野の道のとおければ

まだふみも見ず 天の橋立」(60) 小式部内侍

(平安中期1012年頃)

(母のいる丹後は遠く、私はまだその地を踏んだこともなければ、

母からの文も見えていません。大江山そして生野の道、あまりに遠い、天橋立・・・)

小式部内侍は、和泉式部と最初の夫、橋道貞との間に生まれた娘で、年少の頃から母親とともに中宮彰子に仕えました。母親譲りの美貌と才気を発揮し、関白藤原教道(道長の息子)、滋井中将藤原公成の子を産みましたが、25・6歳という若さで亡くなったと伝えられています。

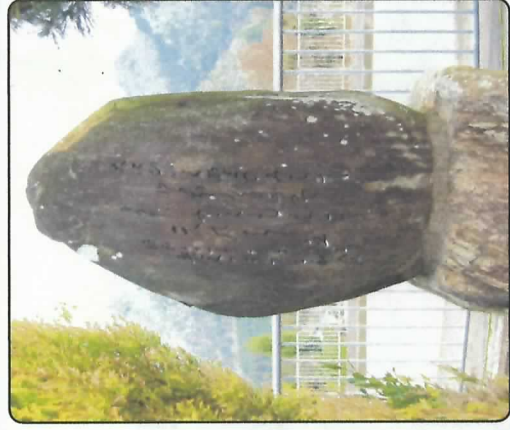
「大江山～」の句は、母親の和泉式部が藤原保昌と再婚して丹後の宮津に行っている(1012頃)、都で歌合の会があり、小式部もその歌人を選ばれましたが、たまたまそのときに藤原定頼(百人一首の「朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらはれわたる 瀬々の網代木(64)」の句の作者。(55)藤原公任の息子。)、に、「歌合せに出す歌はどうなさいませるか。丹後に人をおやりになりましたか。お母様からの使いはまだまだ来せんか。さぞかし心細いでしょうね。」と、からかわれたのに対して、定頼の袖をつかんで引き止め、母のいる丹後は大江山・生野を越えていかなければならずあまりに遠いので、その地を踏んだこともなければ母からの文も見えないという意味のこの歌を即座に返したため、定頼は返歌ができず閉口して振り払って逃げていったと伝わっています。当時、小式部があまりに若いので(その頃は15～16歳だそうです。)、母親に歌を代作してもらったという噂があったためで、親の七光りを否定するともに、むしろ遠方の母を慕う娘の自然な感情も感じられます。

この句に詠まれている「いく野」とは、現在の福知山市生野であり、小式部は、この地名と「行く」という語をかけて丹後への道の遠さを言っています。平安時代から旧京街道の宿場町として栄え、江戸時代には宮津藩主が必ず一泊を当地において宿泊したといわれています。

現在の生野の郷は、田園風景が広がる静かな町ですが、今でも旧街道沿いに本陣の跡が残り、近くには約1500年前用明天皇の時代に丹波国七天神の一社として建立され、現在も菅原道真を祀る式内生野神社があります。



京街道 生野の郷



歌碑



式内
生野神社



小式部内侍と生野の郷